

2026年3月15日 第二礼拝

説教題『目を覚ましていなさい』マルコによる福音書13章32～37節

主任牧師 加藤 誠

「それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。」(マルコ福音書13章34節)

十字架に向かう主イエスが、従う弟子たちに繰り返し語られた言葉に「目を覚ましていなさい」があります。この「目を覚ましていなさい」という言葉にはいったいどんな意味が込められているのか。今朝はそこに心寄せて、聖書に聴いていきましょう。

ところで、米国国防省は、このたびのイランへの軍事作戦を「壮絶な怒り epic fury」と名付けました。“epic”とは「壮大で素晴らしい、伝説級の」、俗語では「すごい！やばい！」という意味で、少し自己陶酔的なニュアンスがあり、自分で自分のことを「すごくてね！」と自慢げに語っている言葉のようです。そして驚くべきは、米軍の指揮官たちは「この戦いは聖書のハルマゲドンを担う、悪の殲滅のための聖なる戦いだ！」と兵士たちを鼓舞しているとのこと。「ハルマゲドン」はヨハネの黙示録に出てくる神と悪との最終戦争のことですが、「自分たちは神の代弁者として悪を成敗する、すごいことをやってるんだ！」というわけです。戦争を始める国の権力者たちはみんなそう言って「自分たちの正義を正当化し、若者たちを戦場に駆り立てていく」のですが、その戦争の正当化に聖書が用いられていることに深い憤りを禁じ得ません。しかも米国の「福音派」は「神の千年王国」をもたらすハルマゲドンを歓迎し、この戦争を大いに支持しているというのですから、胸が痛みます。「福音派」の人たちは主イエスが語られた「平和をつくりだすものは幸いである」とか「武器を取る者は武器で滅びる」という言葉を、いったいどう読んでいるのでしょうか。

さて、今朝のマルコ13章32節以下では「目を覚ましていなさい」という言葉が三回も語られています。32節「その日、その時は、だれも知らない。…父だけがご存じである」。「その日、その時」とは、この直前に主イエスが語られた「人の子（主イエス）が再び来るとき」のことです。キリスト教信仰で「再臨」と言います。「再臨」は「神の救いが私たちの目にはっきり見える形で成就するとき」です。今の世界は、私たちには分からないことだらけ。神が共におられるなら、なぜこんな不条理がゆるされているのか？なぜ良い人が苦しみを負わされて、悪人が栄えるのか。疑問に思い、悔しく思い、腹を立てざるを得ないことがあふれています。「再臨」はそういう私たちの疑問が、再び来られる主イエスによって晴れる日。「そうだったのですね。イエスさま！」と賛美が世界中にあふれる日。それが聖書の「再臨」のとき、「終わりの日」です。ですから「再臨」は、クリスチャンにとって希望の日、確かな希望です。どうして信じられるのですか？と聞かれたら、「十字架の主が神によって復活さ

せられ、その主が『わたしは再び来る』とはっきり約束されたから」と答えます。

ただ、その「再臨」の希望が実現する前に、世界は戦争の時代に突入すると、主イエスは語られます（13章の前半）。「わたしを名乗る者、偽メシア、偽預言者が現れても、それに惑わされないように気をつけよ」（3節）、「慌ててはいけない。それらの苦難の後、人の子（主イエス）が大いなる力を帯びてくるのを人々は見ると」（24節以下）と。ただ「その日、その時はだれも知らない」。旅に出た主人が、ある日突然帰ってくるように、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、分からないのだから、「目を覚ましていなさい」と言われているのです。

このような文脈で語られている「目を覚ましていなさい」という励ましには、どういう意味が込められているのでしょうか。

第一に、戦争の時代において善きものが悪に次々と飲み込まれても、惑わされず、慌てず、そして諦めてしまわずに、十字架の主が約束された「救い（平和）」の実現を待ち望み続けなさい…ということ。例えば今、ルワンダとコンゴ間の紛争で多くの人が痛んでいる中、あきらめることなく希望をもって平和の架け橋の働きを続けている若者たちがいます。彼らの姿に、悪の力、偽預言者、偽メシアに惑わされることなく、十字架の主の救いと平和の実現に希望を置く「目を覚ました信仰」を見ます。

第二に、主イエスが最後まで闘うように神の前に祈られたように、あなたたちも主と共に目を覚まして祈りなさい…ということ。33節「目を覚ましていなさい」を、多くの英語訳聖書は「watch and pray」と訳しています。「Watch」というのは、何となく見ているのではなく「注意して見る、見張る」という意味。英語訳聖書はそこに「Pray（祈る）」を加えるのです。実際、この後、ゲッセマネの祈りの時に主イエスは「心は燃えていても、肉体は弱い。目を覚まして祈っていなさい」と弟子たちに語っています。肉体的弱さを抱えた私たち人間の力だけでは、善を飲み込む悪の力に勝てないのです。弱さを認め、自らの力におごることなく、神の前に小さくなり、神からの知恵を力と勇気を求めていく。それが「目を覚ましている」ということです。

そして第三に、今朝の個所の34節に注目したいのです。主人から「割り当てられた仕事と責任」に忠実であれという言葉。ここで「責任」と訳されている言葉は「自由な裁量による権限」という意味。主イエスが「あなたの自由な裁量で、自分で考えて、自分の責任で取り組みなさい」と託してくださった仕事という意味です。たとえば主イエスが隣人の痛みや苦しみに敏感に歩まれたように、私たちも「自分の安泰」に眠り込むことなく、今日、わたしに託された隣人との関係の中で、隣人の痛みや苦悩、悲しみに敏感に、主と共に歩みなさい…ということではないのでしょうか。そのように、悪の力に飲み込まれることなく、自らの力におごることなく、主イエスの背中を見つめながら、「目を覚ました信仰」をもって十字架の主に従っていきたいのです。